

特集号 1986年6月

いずみ



こどもの明るい未来のために語り継ぎます

私の戦争体験

第8集

今も消えない 壮烈な記憶

狭山支部
南 ひろ子



私の戦争体験は、たった三歳の時のことです。その為、現実に体験したごとと、その後折々に聞かされた話はどこかで重なって区別がつかなくなっていることもあります。その中でも、今だに切々にはつきり浮かんでくることがあるのは、あの日の体験がどんなにげしいものだったのかということが分ります。

当時、私は岡山市内の練兵場（今の岡山球場）の近くに住んでいました。

はこんなことを言うのでしょう。一夜明けてみると、門柱を残すのみで、我家は丸焼け、防空壕の中まで焼けてしまっていました。大きくなったらしようねと言っていた、昔から伝わっていた貴重な百人一首の数々、思い出をつくることなく灰となっていました。それでも家族は皆無事でした。その事をよるこばなければいけないのでしょうか。

その時一緒に逃げた叔母は当時女学生でした。絵を描いたり、家の中で本を読んだりの生活の好きだった静かな



父は伊勢の工場に単身赴任のため、母と母の妹、姉二人（七歳と五歳）と、医大の学生二人の下宿人との生活でした。物が不足した時代だったはずですが、以外と何でも食べられていたように思います。寝る前には必ず枕元に防空頭布と着替えとお菓子をいっぱい詰めこんだリュックサックと靴を置いて寝ていました。いざという時は、これだけは持つて逃げるようにと言われていました。

ある晩、夜中に母にたたき起こされました。何が何んだか分らないうちに、叔母と姉二人と一緒に逃げていました。母と医大生は、少しでも家を守る為に後に残ったようです。気がついた時は、いつのまにか私と下の姉の二人だけになっていました。とにかく走っていました。防空頭布もすぐに火がつきます。火を消すために頭をたたきたたき、わけもわからず二人で走っていました。あまり熱いので皆が川に入っていました。一緒になって入っていました。三歳の子には深すぎたのでしよう。あつというまにぶくぶく。姉とずっと手を離さないのが幸いして、近くの人が助けてくれました。あの時誰

やさしい女学生でしたが、学徒動員の労働はきつすぎたのでした。まもなく結核にかかり、山の中の療養所で淋しい淋しいと言いながらなくなりまし。丁度今私の娘の年齢になります。高校生活を楽しんでいる娘を見る時、この平和な時代を生きていられる幸せを思うにつけ、二度とこのような不幸な戦争を起してはならないと思うのです。たった数時間のこと、三歳の子供の記憶に今なお残る恐ろしいことの起こらないように!!

かが助けてくださらなかったら、今の私はなかったのです。本当に有難うございました。

川はこりこり。また二人で叔母や姉を探して広い練兵場の中を走り回りました。四方はどちらを見ても真赤でした。時々その中に黒い影が浮かびます。それが皆叔母や姉に見えるのです。そつちへ向かいかけると消えてしまいました。また別の方向に人影が、また走りまわりました。一晚中火の中をその影を追っては走り回りました。

夜明けと共にようやく火もおさまり、人の顔も見えるようになります。近所の人が私達を見つけてくれました。その時は、防空頭布も靴もなくなっていて、ワラジのようなものを片方だけはいていたそうです。母に会った時の姿は、それはひどいものだったそうです。うれしそうに様子もなく、泣くわけでもなく、ただポケーと立っていたそうです。三歳の子供にとつてあまりにも一度になにかが起こり、それも何がどうなっているのか分らない。ただ恐怖心だけで逃げ回っていたのだと思います。お互いに頼れるのは、三歳と五歳の姉妹。悪夢の一夜というの

雨天体操場は 死骸でいっぱい

春日丘支部
岩下 初子



戦争で思い出されるのは、物不足、食糧不足ですね。昭和一六年に始まった戦争では、日を追って窮乏生活を強いられるようになりました。配給をもらいに行っても、大根一つだって家族数に合わせて大小に切ってから渡される有様でした。子どもの靴を買うにも配給でしかも、くじ引きで当たらなかつたら買えません。冬でも足袋もなく素足でした。五年生の娘と三年生の男の子は強制で滋賀県の水口に学童疎開

させられ、月一回の面会しか許されませんでした。

一日一日空襲がげしくなつてこのままでは死ぬ、こんな事はしてられないと田舎に疎開を決心しました。一人八貫目と言われて殆んど物は捨てる気で荷作りしましたが、縄一本も買えないので奈良まで荷作り用品を買いに行き、ようやく荷作りをして湊町駅まで頼みに行きましたが、今荷物がいっぱいだから一週間待つてほしいと言われて、その間に滋賀県へ子ども達を迎えに行きました。どうせ死ぬなら親子一しょに死にたいからと先生にお願いして連れて帰り、久し振りに白い御飯をたいて子ども達の毎日の事をいろいろ聞いてる内に外がさわがしくなり、出て見ると近くに焼夷弾が落ちたとのこと。これは大へんだと思つていと避難命令が出たので、夢中で持てる物を持って逃げました。

人間あわてると何するか分りませんね。おじいさんは柄杓（へしやく）を持って逃げようとしているので「何持つてるの」と叫ぶと、自分の仕業に腹がたつて柄杓を地面にたたきつけていましたね。

避難場所のクボタ鉄工所の壕にたど

り着いて我が家の方角を見ると一面火の海でした。この日は昭和二〇年三月一日、大阪の第一回空襲で、忘れることができませぬ。

大阪が焼けたというので神戸方面から炊き出しが届けられ、おにぎりを貰いに行列しました。ふと気がつくといつしよに逃げて来たおばあさんが居ないので探していると駅の線路の上で虫の息でした。ホームで足をすべらせたのでしよう。駅員さんに小学校の避難所まで連れて貰いましたが、手当てもしてあげられない内に息を引きとりました。

毎日毎日死骸が運びこまれて、雨天体操場は死骸でいっぱいになり、死臭が満ちあふれました。半焼けの死骸、窒息して苦しんだ姿のままの死骸が、まるで浜に干された魚の様に並んでいます。見渡す限り焼けてしまつて、電気もつかず、子供たちは「こわい、こわい」と泣き続けました。

一週間位してから、岸和田のお百姓さんに頼んで死骸を焼いてもらう事になり、校庭に長い穴を掘り、そこで一回七人位並べて焼く事になり、幸い第一回目に（おばあさんを）焼いてもら

う事が出来ました。

骨を拾うもそこに広島尾道の着のみ着のままで行きました。

おじの家の蔵に置いてもらったんですが、食べものが違うし、みじめでいつしよに暮せなく、村の観音さんのお堂が空いていると聞き、おばに借りて貰つて引越しました。妹がふと一枚持つて逃げていたので五人で引張り合つて寝ました。

子どもの疎開先のふとんがなかなか着かないので、尾道から水口までわざわざとりに行きました。荷作りを解いて見ると黒ゴマをひっくり返したようにシラミが飢え死にしていました。子どもが寝ている間にこれだけのしらみに血を吸われていたのか、戦争がなければこんな目には合わせなかつたのに、本当にかわいそうに思いました。

家を焼かれ、着のみ着のまま食べ物もない上に、さらに追い打ちをかけて困つた事は、円切り下げでした。大事にしていたお金も何の役に立たなくなり、もう一度大阪に出てという夢も消えてしまいました。この時程くやしなく悲しかった事はありません。夏など着る物がなくて裸で過しました。お堂

の廻りにカボチャを作り、少しばかりの土地にジャガイモを植えたりしました。とれたカボチャを半分に切つて雑穀を入れて蒸したり、ジャガイモをゆでてつぶし、貰つた古い梅干しを味つけにして食べました。そしてヤミで買った麦をおかゆに炊くのが毎日の仕事でした。

当時ヤミ屋が大勢いました。ヤミをしないと食べていけないんです。法を曲げる事が出来ないヤミをしないで飢え死した裁判官がいました。如何に悪法だったかと言うことです。ヤミをする人を取り締り、とり上げた物を警察は我が物に。身寄りのない人を集めた収容所の監視が、食糧のピンハネをして中にいる人は次々死んで行ったとか、いろいろ聞いたり新聞で見ました。

一八年間も田舎に居てやっと大阪に出て来ましたが、苦しかった生活を思う時、二度と戦争はいやですね。国民の一人一人がもっともつと深く物を考えるようにして、中でも人口の半分いる女の人が権利の主張を今の様な浮ついたものではなく、本当の意味で力を出して頂きたいと思ひます。

焼野のキジの母親は本能的に子ども

を守る力を持つているはずで、大事な子や孫のために女の力で政治を変えなければ今度戦争がおければ、もうおしまいですよ。（聞き書き）

私の戦争体験

村田 信一

（浅香支部・米田英さんのお父さん）



戦争により身辺の窮乏は実に徐々に迫つて来た。そしてそれは耐乏生活という言葉ですべて帳消しにされた。窮乏が徐々にであったればこそ、私たちは今日に生き残ることが出来たので、あのだん底生活が一ぺんに迫つて来ていたら、おそらく大多数の民衆が倒れ、

今日に見るアフリカ難民の騒ぎどころではなかつたであろう。飽水、飽食、飽遊、飽眠の今日からは想像に絶するようなことが、現実私たちの身辺におそいかかつて来たのだから、戦争ほどおそろしいものはない。昨日も卒業後六十一年目の小学校同窓会に出席して、戦死、戦病死した学友の思い出にふけたことである。

長い戦争の初期には、生活物質の統制ということがはじまり、食糧の配給制、衣料切符制から、預金封鎖などと、私たちの身辺にはだんだん重いタガがはめられていった。一ぱいのうどんで代用食にしよう、母や妻がうどんやの店先の長い行列の中で順番を待っていたことを思い出す。私に用意された昼手当には、とうもろこし粉を固めて焼いたのがはいつていた。

先日、一度あのころの体験をしてみようと、だんご汁を作ってもらったが、とてもあのころの味が出てこない。今の材料が良すぎるのである。

私は、師範学校を卒業したので、短期現役という五ヶ月の軍隊生活を終えると、当時の第一国民兵役というのに偏入され、防衛召集にかり出されたが、

戦場の体験はない。その代り、いわゆる戦後の窮乏生活、みじめな敗戦の憂き目は、いやという程味わった。

強制疎開中の居宅は焼かれ、弟は戦死し、母はグラマン機の銃撃により戦災死と、あらゆる戦争の苦難を経て来た。

防衛召集というのは、空襲警報のサイレンが鳴ると、すぐ軍服まがいの国民服に巻脚絆で定められた場所にかけつけ、空襲による被害の処置か、被害を少しでも少なくしようというものであったようだ。国民軍幹部適任証というのをもらっていた私は、士官まがいの仕事をさせられたが、もちろん丸腰

で、銃もなければ剣もない。警報が解除されると解散だった。

堺が空襲をうけた夜は、私は当時の勤務校で宿直当番だった。私の家族（妻と男児二人）は、私の勤務地近くの農村の知り合いの家に疎開していた。学校の応接室は町の警防団本部になり、国防色に黒衿の団服の人が詰めていたし、工場動員で生徒のいなくなった教室には、予備役か後備役か、四十歳位の人を中心とした召集兵部隊が入っていた。銃も剣もなく、水筒代りの竹筒を腰にぶらさげて、昼間はどこかへ出ていった。ラジオ放送か何かで、和歌山空襲について堺も空襲をうけたこと

を知った。南の空も、北の空も真赤になっっているのを、講堂の屋上に作られた防空監視哨というのの上って見ているら、突然頭上に爆音がして焼夷弾がバラバラと落ち、火の手の上るのを見た。学校は焼失をまぬがれたが、私は御真影を急造の背負袋に入れて、背中に背負い、学校の近くで一ばん安全といわれていたある工場の防空壕へ、非常召集された職員の人かといっしょにのがれていたった。

空襲の夜が明けて疎開先の家へ帰ると、家族は無事だったが、自宅が気になるので、自転車で堺へ向った。油脂焼夷弾による絨氈爆撃のものすごさを目のあたりにした。自宅の焼跡には、庭先の沓脱石の他は何一つ残らずあたりはすっかり燃えつきていた。風呂場のあったあたりにころがっていた洗場の古い模様のタイルの破片一つを拾って来た。今も表庭の花鉢の台にしている。

あの朝の土居川は死屍累々だった。泥水に漬ったところは人の膚だが、水面から出たところは真黒に焼けていたのを大小路橋から見下した。戦争は二度とくりかえしてはならない

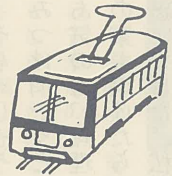


いの一語につきる。

幾多の戦火の中で

福井 照子

（狭山支部・前川浄子さんのお母さん）



思い出したくない戦争

第二次世界大戦末期に日本各地を焦土化したB29爆撃機による空襲、恐ろしい戦争。思い出したくない戦争。昭和一九年六月に始まり、昭和二〇年三月から本土大空襲の惨劇が、思い出しても身のちぢまる思いが目に浮び、今書き出すのも恐ろしい。種々雑多な事沢山ありましたが、我が目で見て来た

事だけ書いてみます。年月日は定かでないのです。もう必死な気持で過して来たので覚えていないのです。

主人の姉の用事に出かけての帰り道の事でした。大阪市電に乗り大阪城の前あたりに来た時、警戒警報のサイレンが鳴りわたりました。電車は急停車し、乗客達はおろされ、皆あわてふためき逃げかけた時、大阪城の前の防空壕へ入る様命令されましたが、私はこの近くに八連隊と三七連隊の兵舎があるのでねらわれると思い、死ぬ気になって一目散に上六に向って走り出しておりました。次に敵機来襲のサイレンの鳴りひびいた時、私は上六の前の便所にかけて込み、水道の前で小さくがみこんでしまいました。同時にザーと異様な物音、ドドンと地ひびき。思わず身をすくめ耳をふさいでおりました。しばらくして大阪城の方を見ると黒い煙が立ち、人々がこちらに走って来るのを見えました。その中に一緒に防空壕へ入ろうとさそってくれた人が、傷をおって来るではありませんか。ああ神様有難う御座いましたー思わず胸に両手をあわせました。帰りの電車の中、人々が空襲の恐ろ

しさをいろいろ話して居る中で、爆弾直撃をうけ下半身が埋り、首だけ出している人があったとか、自分は少しの埋りだったので逃げられたと、どろどろの服で話して居ました。私はどうして帰ったかわかりません。家に着くなり主人の母様とだきあって泣いてしまいました。お互いに無事を喜び乍ら。

また昭和二〇年三月一三日の晩B29来襲。電気を消し真っ暗な中に息をひそめ押入れの中で待避して居りました。焼夷弾投下一〇〇メートル程離れた桃山中学が直撃をうけ、校舎は焼けおち、自分の家に近い周囲の家がたちこち焼けました。夜の事とてただあれよあれよと云うだけで、どうする事も出来ませんでした。

また六月朝、B29敵機来襲、自分の家の裏庭の松の木の前に造った防空壕に入って待避して居りました。ザーッという音と共に何か落ちた音、誰かの「焼夷弾落ちたぞー」の声に表へ出て見ると真向いの家が燃えています。向いの人は、子供が居るので警戒警報鳴るとすぐ何処かへ避難して、留守だった所へ落ちたので、燃え広がりを留意してあった小さな消防車二台で消し

ました。私達も二階の雨戸をしめ、下の入口の戸に水をかけて、向いの家の火をリレー式で一生懸命に消すのに努力しました。が、火力の強さにまげ次々と燃え広がりました。

自分の家を消していた人が、力つき茫然として水かける事もせず、火の燃えさかる様を見上げたまま動かなくなっていました。するとどうでしょう、消防車で消していた男の人が「こらしつかり消したまえ」と、その人にホースの水を全身にかけました。ハッと驚いた本人は、うらめしげに水をかけた人をにらみつけ消そうともしませんでした。ああ気の毒、無理ありません。もし私の家も焼けたらそうした事であろうと思いました。私も火の熱さにたえかね、何べんも頭から水をかぶり、また火を消すのに努力しました。やっと消えた時は一二軒丸焼け、前は広い空地になってしまいました。

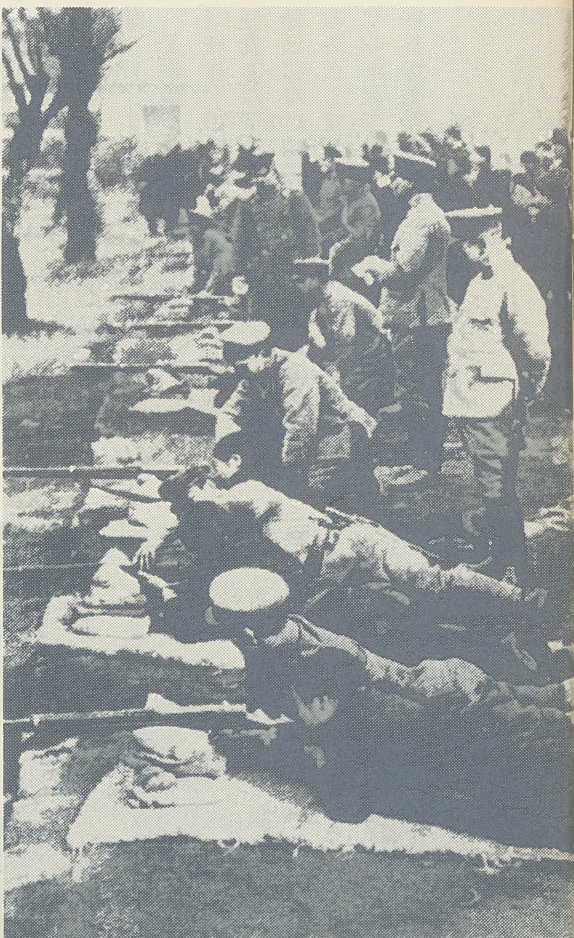
やがて帰って来た向いの人は、焼けた我が家を見て何も云えずただおろおろとするばかり、実にいたましくお気の毒な事でした。寸時にして家をなくし残酷其の物でした。

またある夜、神戸に敵機来襲、爆弾

投下されるのが我が家より北西の方によく見え、炎をあげて燃えていました。ラジオ放送にて皆頑張つて水かけている様子。爆弾投下した飛行機は、折り返して私の家の方へ飛んで来るではありませんか。丁度自宅の上空は飛行道だったのです。思わずギョツとなり身がまえました。逃げるのを忘れ立ちすくみました。B 29の大きい機体がかぶさる様に近づいて来ます。私は逃げず敵機をにらみあげ落さば落とせ何事やあらんと、頭の上まで来た時初めてほつとしました。もし落しても自宅へは落ちないからです。思わずへたへたとすわり込んでしまいました。神戸の方では依然として燃えています。ああ神戸の人達よ頑張つて消して下さいと祈らずにおられませんでした。

故郷よ無事であれ

昭和二〇年七月一日日夜、堺の方ラジオにてわかる)で焼夷弾投下されているのが大阪よりよく見えました。夜の南空に美しく、赤いビラまきされていく様に沢山落ちて行くのがはつきりと見えるのです。ああ、どうなるのでしょうか。



実は此の家は、一週間前に家屋疎開の為にここに転宅して来たのです。前に居った家は焼けてしまったのです。まかり違えば焼け死ぬ所でした。此の家をさがす為、他の見つけた二軒も焼けてしまったのです。この家にきめてよかったですと思わず神様にお礼の祈りをささげました。

前の家が(堺市中之町西2丁)焼けたのを見に行きました。家はもちろん前の家の並び全部。裏の堺病院も焼け、入口の中の泉水の中で看護婦さんが二人だきあって死んで居りました。髪の毛もやけ、みじかくちぢれ体もミイラの様になって居りました。近所の人々は何処へ。どうか無事でいらっしやる

様に。後に聞けば助かった人、直撃をうけ即死した人、子供だけ残された人いろいろありました。

近所の酒屋、醬油屋の焼けあとでは、酒樽、醬油樽から、ちらばっている瓶の中へ入れ、もち帰る人々が蟻のように列になって動いています。ああ、あさましい人。弱身につつけこむ悪魔のような姿。雨が降って来ました。人々の姿を悲しむが如く、これが戦争なのでしょう。お互いに助けあい、いたわりあう心もなく自分自身の為ばかり考えているのかの様。ああ、主人は今頃どうしているかしら。警戒警報発令あるたび、今宮中学の防衛召集の為行くのです。人助けの為無事な人は安全な場

堺に居る父母や弟や如何にと、あくの日直ちに堺へ。でも阪和線は金岡どまり、空襲の被害があつたからです。金岡よりあるいて里へ。その道すがら防空壕に直撃をうけ、うもれた我が妻と子供を掘りおこしている男の人がありました。それを人々が取りかこんで見ているのです。手伝いもしないで、なんと腹立たしいという思いで私ものぞき込むと、男の人は掘るのをやめて人々の顔をなさけなそうな顔をして見まわしました。私は思わずそこを去りました。涙が出そうでした。またしばらく行くと、むしろをかぶせたのがあるのをあけて見ている人があるので、私ものぞいて見てびっくりしました。女の人が電柱の倒れた下敷になり、着物は焼けてマネキン人形を置いた様な形になり、便を出して死んで居りました。私は思わず声を出す所をかみころして逃げる様に走りました。足はふるえ次第に両親の事が心配になりました。やがて帰って来ました。あ、あつたあつた、我が家が無事でした。父母をはじめ弟も無事、互いにだきあってよろこびました。他の人に悪いがほんとうによかったと。

所へ。死んだ人の身の仕末、頑張つて助けてあげてね。

私は目の前にいやな光景を見て、何か人達にどなりつけてやりたい思いだったが言えなかつた。私もその人達と変りない姿に見えたであろう。その場より逃げさりました。日本人よこれよりどうなるのでしょうか。

やがて昭和二〇年八月一五日。負け戦さになり終戦。主人は、米国人上陸の危険を感じ、私を何処か安全な所へ避難せよとすすめるのです。私は自分だけ安全な所へ行きたくない。あなたと共に暮りたい。死する時は一緒にと、今まで暮して現在に到りました。戦争はもういやです。私は子供がその時までできなかったのです。あれは苦勞はまぬがれなかつたでしょう。

一家全部死んだ人。一部の人が死に、生きのこりの人の不幸な毎日。戦争孤児の淋しい思いを考える時、皆さん力強く生きぬいて下さいと思いました。戦争はいやだがやはり防衛が必要と思えますが、しっかり防衛力を高め、二度と国へ侵入して来ない様守つて下さる事を祈るのみ。

火の海をこえて

土田 数江(90歳)

(総合企画室広報担当
土田進一さんのおばあさん)



戦中は、大変な食糧不足でした。三人分の配給はありましたが、一人分にも足りない水ばかりのおかゆとパン一個だけ。

子供の一人は、どうしても「パン・イモ」は食べない。そのために朝食も昼食もなく、午後五時からおかゆの配給所になっているソバ屋に行くのを楽しみにして、子供たちは、走って帰って、一足でも早くソバ屋に並んでは、一杯のおかゆを買いました。

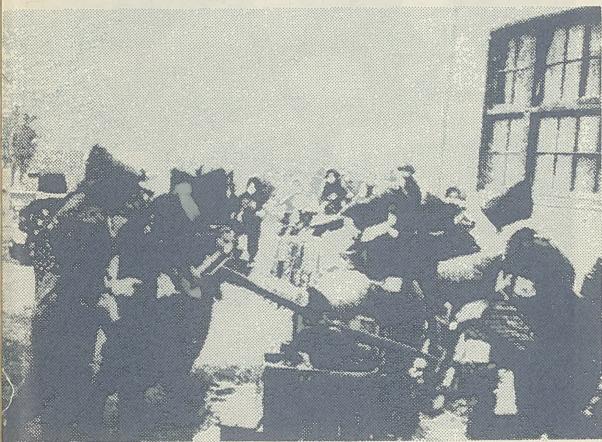
つと鐘紡の畑へたどりつきました。非常時には、一〇軒の隣組で行動することになっていましたが、すでに五軒は田舎に疎開していたので、残っているのは五軒だけになっていました。しかし、この畑に逃げてきた時には、一人の奥さんが見つからず、とうとう判らざりました。この奥さんは、ご主人から「大切なもの(通帳など)は身に付けておくように」と言われていたので、肌身はなさず持つておられたようですが、「今になってみれば、何もかも無くしてしまつた」と、ご主人が嘆いておられました。防空壕の中でも、この奥さんは、反狂乱のように「こわいこわい」と叫んでおられたことを、今でも思い出します。

私たちが腰をおろしているところへ、一台のトラックが来て「この人を頼みます」と言われました。赤と黒の柄模様の着物を着ているのだと思つてよく見ると、全身のひどい火傷でただれていたのです。私たちは、この人をつれて安全な場所へ移ることができるかどうか、どうして良いかわかりませんでした。気の毒に思いながらも「負傷者を運ぶ車を待っていてください」

そのおかゆが何でこしらえてあるかというところ、お米などは数えるほどで、ドロドロしているのは、フノリのくけた汁でした。それでも夕食の足しにと思つて、我れ先にと争つたものでした。

昭和二〇年六月七日、都島区に大空襲のあつた日、私は町会役員で詰所へ。長男は戦争へ、二男、三男は学徒、四男は学童疎開で石川県へ。家族はチリチリバラバラになっていました。

午前九時ごろ空襲警報が発令。私は町内のことでゴタゴタしていたので、自分のところのことなど考えていられません。たちまち焼夷弾がドン



と言つて、私たちは他の場所へ移りました。

そのうちに空襲もやんだので、元の家の方へ行ってみました。一面は焼野原。電車の線路添いの家はところどころ残つており、近くの人達は、そこへ集まつておられました。一人の若い婦人は赤ちゃんをおんぶされていました。その赤ちゃんはおんぶされたまますでに息をひきとっていました。

夕方、焼け出された人達の宿になつた「鐘紡」へ行きました。夕食などとても無いだろうと思つていたら、一人の奥さんがお米を二斗も持つてきてくれました。もしやの時に、早くから守口の百姓さんのところで買つておいたとのことでした。私達は、おかげさまで夕食をいただくことが出来ました。そして、板の間なれど、露をしのぐこともでき、一晩中語り明かし、翌日は隣組共同の畑で、玉ネギ、ナスなどをもらい、お別れの食事をしました。

六月七日、八日と二日間そこにいました。田舎のある人は一日も早く帰つてほしいということで、私は九日の午後出発しました。焼野原の桜の宮駅より、スシ詰の列車に乗り、宝塚まで来

ドン発射され、空は一面の火の海、自分たちの町はたちまち、あちこちで火があがりました。

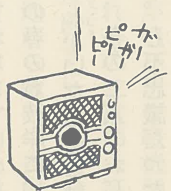
私達は女消防団なので、ポンプを持ち出し、消火にとめましたが、引つきりなしの爆弾のために、消火どころではありません。爆弾が雨のように降ってくるたびに、「シュー」という火があがる音とともに腹わたがひき裂かれ、髪の毛が逆さに立つ思いは今でも忘れることはできません。ポンプで水を押し出している間にも、爆弾の雨は、ひっきりなしに降ってくる。もう、どうすることも出来ない。警備の男の方が「こんな激しい中で消火しても、皆があぶない。早く安全な場所に逃げなさい」と言われ、気がついたら、家も道路も一面の火の海。上からは火の雨が降ってきます。はじめは防空壕の中に入っていました。その中まで火が入ってきて、危険になつたので、大布団を頭からかぶつて城北公園へ避難することになりました。しかし、そんな所まではとても行ける余裕がありません。そこで、火の海を越えて煙のうすいところを目当てに逃げまわり、や

ると日が暮れており、ホテルが飛んでおりました。ああ、何という地獄と極楽の別れ道だろう。おそろしい戦争、何のための戦争だろう。もういやだ、と思ひました。そして極楽のような景色を見ながらも、私の心の中は、誰も待っていてはくれない所へ、多勢の家族をつれて帰るこれからの生活の不安でいっぱいでした。

見えない戦争

八下支部

野島 幸代



主人、昭和十九年三月生れ、戦争は主人が一歳半の時に終わりました。私は

二十三年生れ、ほとんどかわりのない時代に育ちましたが、主人は生れながらにして、父のいない子になってたそうです。主人がお母さんのお腹に入っていた三ヶ月頃、お父さんは出征。「男の子が産れたら、博継と名付けてくれ。女の子なら、お前の好きな名前にして良い」と言い残して……。そして男の子誕生。写真を送ったけど、見たか、見ないかわからないと主人の母の二つ話。主人のお父さんの命が消える頃、主人は元気に産声をあげたのかも知れません。いったったか主人が「俺はもう親父の年を越えた」と言った事があったんです。私、即言い返したんですヨ。言い返しは、悪いと思っただけで、「アンタ、それはちがうで、お父さんは、アンタに命をくれたんですよ、そうやからアンタは、丈夫で病気一つせず今まで来れたんや。そうやから、二倍も三倍も生かしてもらわんと、親不孝やで」と、涙声になりながら言っていた私。

結婚して間もない頃、テレビで実録の戦争激戦地を行軍している兵隊さんを映し出された事がありました。その画面の下に「この中に肉親、またはお

知り合いの方がおられましたら、テレビ局までお知らせ下さい。写真をお送り致します。」の字幕が流れていました。主人は息もころさずその画面に見入っているんです。顔も知らない父が、もし、この中に……と思っただけでしょう。

私は後ろ姿を見て、出て来る涙が止まりませんでした。今これを書いていても泣けてきます。その時の事が忘れられないんです。男と言えどやはり人の子、一目、親らしい人でも捜したかったのでしょう。主人は、父親に生き写しだそうなんです。その主人も二人の子の父親になりました。子供を抱きながら、自分も南の空に散った父に、抱かれた気持を味わっていたと思います。

その子供達も、大きく成長し私達は、幸福な生活に浸り、戦争という言葉も忘れていた訳ではありませんが、テレビや本で耳にしている、本当に除々に遠い存在のものになりつつありました。

ところが、上の子が六年生になった昨年、学校で社会歴史の中に戦争についての事が出てきたのでしよう。男の子らしい厳しい意見が出ます。主人に聞いています。対馬丸の映画、ハダシ

のゲンのアニメ、下の子が二年生で、戦争についての自身の話まで首をつっこむ有り様、後はもう私達夫婦、親として話せるだけ戦争の文字について折にふれ言っております。そして主人が始めて今年の春のお彼岸に、もう一人おじいちゃんがいいたんやと話しました。子供には、今の二人のおじいちゃん他……。と不思議だったと思いましたが、もう理解のできる年頃、春と

秋のお彼岸とお盆のお墓参りの意味、平和な家庭の中にも、見えない戦争のキズがずっと残っていくんです。いやでも現実として続いてゆきます。

そして実の私の父自身、七年間もの長い間戦地で戦っていた経験の持ち主、毎年、終戦記念日が近づくと戦友さんの事を言い涙を流す。今年老いた父、「嫁さんや子の名前を呼びながら死んでいった沢山の戦友は、それはそれは気の毒や……。」とその父と死んだ主人の父が偶然にも同じ年なのです。

底から破壊するからである。

世界は今二つに分かれて、自由諸国と共産圏に二分されている。ボタン一つ押せば国が潰滅するような時代である。世界唯一の被爆国である日本は世界に向って核廃絶を叫びつつけているが、今こそ為政者は核の絶滅に、そしてその実現に全精力を傾倒すべきであると考える。

さて、結論を先に書いてしまったようだが、戦争の体験について二、三書いてみよう。昔から軍隊は連隊という運のよい者が生き残れるのだという俗諺があるが、全くそのとおりだと思う。二二天作の五と、数字では割りきれない現実が存在するからである。その例を一つ書いてみよう。

一、支那事変に従軍して

中国の広東省の広州市に駐留していたわが部隊に出動命令が出て、広州市北方一〇〇キロの奇龍山の掃討作戦に参加した。奇龍山の南方約二十キロ付近より部隊は展開し進撃また進撃をして追撃をしたが敵の退却は速く、それを追っている内に何時の間にか深追いをしすぎて「蝟壺戦術」にひっかか

戦争と私

今井 清

(恵我荘支部・今井 豊さんのお父さん)



戦争体験記を依頼されたとき、世界三大強国、アメリカ、中国、ソビエトを相手に戦った過去が思い出された。

今にして思えば無謀というほかはない。昭和十三年五月、赤紙の召集令状に始まり、昭和二十年十月の在隊証明書にて軍籍は終ったが、戦争という二字は自分としては禁句として余り語ることがない。それは戦争の結末が余りにも悲惨であり、平和を一変して地獄の奈落に突きおとし、文化国家を根

ってしまった。わが中隊は完全に前方、左右の三方を敵に包囲されていたのである。

暫くして敵の一斉射撃が攻勢となり、三方から雨霞の如く乱射乱撃をうけ今にもわが中隊は全滅するかと思われた。自分は第三小隊、第二分隊の軽機関銃の弾薬手をしていたが、敵弾を避けるため地面にへばりついた。頭から二メートル離れた弾丸は「ブルツ」と音をたてる。頭のそばを通った敵弾は「パチッ」という音がする。実戦を重ねた兵士は要領よく敵弾の音を聞き分けた。パチ、パチ、パチ、パチと連続音を聞くことで終りかと死地をさまよう幻覚におそわれた。

自分の前は軽機関銃手の宝塚市出身の宮下嘉作一等兵である。一分間に百八十発の弾丸が飛び出す軽機関銃はすぐに弾丸が切れるので宮下一等兵が弾丸と叫んで後向きに体を動かした瞬間に左側の高地から敵の一斉射撃が始まった。チェコスロバキヤ製の軽機関銃の一発は、無惨にも宮下一等兵の胸部を貫通した。宮下は瞬間虚空を両手で掴んで目をむき戦死した。自分の目の前である。自分も同じ運命を辿るべきで

あるのに、伏せた位置の左側に高さ約一メートル、幅半メートルほどの盛り土の横にいたため敵弾は盛り土に無数に打込まれていた。前後僅か二メートル程の差で命拾いをしたのである。いわゆる運である。

この戦争で多数の戦死者を出したが、後に部隊葬をしてねんごろにとむらった。その後も十数回の戦闘にもよく耐え抜き昭和十五年十二月内地へ帰還したのである。

二、大東亜戦争に従軍して

今度の招集令状は電報であった。岐阜県各務ヶ原市、各務原陸軍航空廠で後に部隊名に改名された。軍人約六〇〇〇人、軍属約六〇〇〇人の大部隊であった。その任務は新しい軍用機の補給と整備であった。自分は部隊長の副官室で軍務に服した。今度の敵は支那ではなく、アメリカである。専ら空中戦である。ここで九死に一生をえた実戦談を記録しておく。

昭和二十年二月天気青々とした或る日、敵機B29の一機が上空約一萬メートルを西から東へと飛び抜けた。速度が早くこれを撃墜出来る速度の速い軍用機はこのときなかった。厳冬の



真青な空を四本の飛行機雲をなびかせて飛んでいる姿を見ると、あれが敵機だというより、天女が舞い上っているような姿であった。後でわかった事だがこれが、わが航空廠を撮影していると思われた。それから約三ヶ月後、空襲警報と同時に、敵機約一五〇機が飛来し、一時間半にわたって覆滅作戦を敢行し、航空廠は全滅した。二五〇キ

死と隣りあわせの青春

小島 速雄

(大野芝東支部・広瀬純子さんのお父さん)



昭和十四年八月は、砲艦鳥羽に乗っていました。私が海軍に入団してから満三年、私は海軍一等兵になっていました。私の乗っていた鳥羽は今の中国の揚子江の沿岸警備についていました。揚子江の大きさ又水の色には、日本の美しく澄んだ川の流れを見ていた私には驚く事ばかりでした。警備についていた洞庭湖の広さにも驚かされ、対岸が全く見えません。まるで海の様でした。砲艦鳥羽はその洞庭湖に入っ

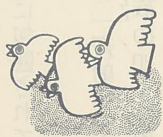
てゆきました。中国の夏は格別に暑かった事を覚えています。けれど洞庭湖を渡ってくる風は実に気持ちよく湖畔の高台に登っては涼風に一時を楽しく過ごした事を思い出します。

「陸戦隊員集合」の号令が艦内に鳴り渡りました。私は衛生兵でしたので陸戦隊には必ず加わらなくてはなりません。鳥羽には衛生兵は私一人でした。この艦は五百トン位の小さなもので乗組員も三百人位でした。医務科は、軍医官一人と衛生兵一人の配置でしたので陸戦隊員集合には必ず私がゆかなくてはなりません。私は上甲板に他の陸戦隊員と共に集合しました。明朝早く長沙作戦支援のため陸軍の作戦に加わり敵前上陸を行う。皆身辺の整理をしておく様に」との艦長の訓示がありました。私は、心身の引きしめるのをおぼえました。開散して自室にもどって明日の必要な治療用品の整理をしました。今度は多勢の負傷者が出る事を覚悟しました。「軍医長が呼んでいます」士官室徒兵が、私を呼びにきました。私は士官室に軍医長をたずねました。「明日の陸戦隊上陸作戦には、小島は行かなくてよろしい。お前がいないと

口爆弾約三六五発の洗礼を受けたのである。わが軍の戦闘機も応戦したが、ものの数ではなかった。自分は部隊長以下数人の幹部と共に堅固な防空壕に待避し幸い直撃弾を受けずに助かったが、戦友及び軍属の中には戦死した人も数多くいた。自分が生き残れたのも、これも運がよかったと思う外はない。

以上は自分が三十五歳前後の若き日の思いであるが、丁度五回ほど当然死すべきところを助っているのを見るに運というべきか、数字でわり切れないものがある。戦争の憶い出の一端を書き記したが、全世界の国民の一人ひとりが平和で繁栄を享受出来る社会が形成されることを衷心より祈る次第である。

以上何分にも数十年前の昔の思い出であり、記憶違いもあるとは思われるがお許しねがいたい。これにて稿を終る。



負傷者が出た時治療が出来なくて困るから」私は敬礼して士官室を出ました。

その夜は同年兵一同呑みあかしました。明日の上陸作戦に加わる同年兵が三人いたのです。朝の三時頃まで呑みません。呑みずにはいられなかったからです。私は軍医長の命令で上陸作戦からはずされていましたが、彼達の心境はどんなであったでしょう。敵前上陸で死ぬかも知れない。死に直面した彼達を、はげます様に陽気にワイワイさわいで酒を呑みかわしました。

朝がきました。陸戦隊員は上陸用舟艇に乗りました。そして艦をはなれて行きました。私は甲板に出て望遠鏡で上陸用舟艇を見ていました。艦の大砲は敵陣めがけて盛んに砲撃していました。近くで聞く大砲の発射音は、耳をつんざく様でした。上陸用舟艇は段々陸地に近づいてゆきました。その内舟艇が敵弾のためあがる水煙で見えなくなっていました。これは大変だ我が陸戦隊は全滅だと思いました。ピューピューと音がはじめました。敵の小銃弾が艦の上を飛んでゆく音です。「用のない者は全員船室に入れ」の

号令が出ました。幸い誰にも弾はあたりませんでした。小銃弾の音を耳もとで聞いたのはこの時がはじめてでした。鳥羽の前後には同じ様な砲艦が五隻、縦に並んで航行していました。一番後には病院船がきていました。一番先は、機雷掃海艇が進んでいました。午後二時頃でした。「ズドーン」という大きな音で甲板に出ました。一番先を進んでいた掃海艇が、機雷にふれて空中高く吹き上げられ河面にたたきつけられていました。機雷の威力は大変なもので小さな砲艦などひとたまりもありません。私は、時々機雷爆破を見ましたが、山の様な水が盛りあがり二キロ位はなれた所にいた艦のガラスが音を立って鳴っていました。

次の日の夕方、陸戦隊員が帰ってきました。全滅かと思つた隊員の姿を見て涙が出てなりません。だが帰艦した隊員の中には私の同年兵が二名もいませんでした。一人は戦死、もう一人は負傷で病院船に收容されています。昨日まで同じ釜の飯を喰つた友は、もう今日はいません。余りにも人の命のはかなさに私の心は沈んでゆきました。この作戦に私も加つていたな

ら私もこの友と同じになつていたかもしれないと思ひました。その後も長沙作戦は続いていましたが、それは陸軍の事で私達海軍は、またもとの沿岸警備にもどりました。

次の日は戦死者を焼く煙が湖畔の空に昇っているのが見えました。身内に見まもられる事もなく、異国の空にまいる上る様子は、淋しいものです。私と同年兵の久保田一等兵は、こうして短い一生を終りました。ほんとうに短い一生でした。彼もこの戦争がなければ今頃は、良いじいさんになつていた事でしょう。

私の青春は戦争に明け戦争に暮れました。一生の仕事と決め海軍に入団した私は、終戦と同時に職業も無くなり、海軍から帰つて来てからは百姓や勤めをしました。貧乏しながら女の子三人を育て今は、皆それぞれ家庭を持つて大阪で暮しております。孫も五人になりました。私は妻と高知でのん気に暮しています。この平和がいつまでも続き、孫達には、二度と私達のような目にあわしたくないと願つております。もうすぐ終戦記念日の八月十五日がやつて来ます。その日は、くしくも私の

戦争という名の嵐

松原西支部
村田シズエ



戦時中の国民は勝つまでは欲しがりませんと、軍隊へ物資が行き届くならと納得していた。衣料は切符制で衣類によって点数が定められ、二枚も買えば家族全員にはとても足りなかった。米は、月十五日ぐらいいしか配給されず、一人一日一合にも満たない。不足分は、大豆や野菜をまぜてご飯を炊いた。町役場から届くのは、魚の内臓をこねて焼いたパンや、米糠を団子にしたのや

らで、鶏さえ食べなかつた。そんな状態で誰も口にごさなかつたが戦争にうんざりしていた。

勤務していても十時頃には、お腹が空いて着替え室でココソコお弁当を食べてしまい、お昼休みには友達と、街に出てさびれた食堂で、行列をして順番が来たら急ぎながらトコロ天や、春雨のすまし汁でお腹を満たした。今、子育てをして愕然と思う。

その頃母は四人の子供にぐち一つ言わず食事を整えてくれ、残れば食べ、無ければこらえていたようだ。私には、母がお膳に向つていた姿が思い出せない。さぞ腹を空かして家事に追われていたのだろう。今にして思い当るのだ。何処かにメリケン粉が有るような、醤油が有るような、と聞けば住んでいた下関から、門司まで連絡船で渡り、辛かった筈なのに背中におおつてニコニコ帰つて来ました。

勤務先が海峡の見える岸壁にあり、よく見かけたことは、輸送船が支那大陸へ行くのか甲板に鈴なりにカーキ色の兵隊さん達が、最後の日本の島に手を振っている。私達はせめてお別れをと思ひ習いたての手旗信号で「武運を

祈る」と送ると、「バカヤロウ」と返るのだった。大きな権力への怒りの叫びだったにちがいない。また敵機が投下した機雷が海中に漂い、船艦がそれに接触してドカンと水柱がたち、沈み始め、水兵さん達が助けを呼んでいるのに危険で、漁師さんも近づけない。見殺しの有様だった。その後の情報は知るよしもない。

とうとう激しい空襲になった。向いの門司に焼夷弾の火の雨が、あつちこつちで夜空をこがした。私達の町会は無事だったが、何も知らず出勤すると通う街並は、焦臭い瓦礫の山がくすぶつていた。まさかと思ひながら勤務先につくとやはり焼失していた。周辺に住んでいる同輩達もひどい被害にあつたらしくかけつけた気配もない。自分の動き回った部署の灰を手ですくい、むなしさ、やりきれなさを抱きトボトボ電車道を帰路につく。同輩が二人死んだと聞く。二人とも朗らかな人だった。何処かに逃げていて欲しいと祈る。また町の人達も火の海の中を逃げ場を失い、中心部の小高い丘に避難して二百人以上の人が死んだと言う。でもその時は、自分が生きていてよかったと

思うだけで何の感情も沸かない。ただ恐しいだけが頭から離れなかつた。

広島にピカドンが落ちたと知つても、どういふ爆弾かも想像も出来ず皆んなも別にさわいでいなかつた。直ぐ情報もなくくわしい事はわからなかつた。それぞれ自身の暮して必死だった。娘さんを農家に嫁がせ、いつでも米が買えると親達が自慢するので、羨しく私も農家に嫁ごうかな、そしたら親孝行ができると思つたものだ。

長崎にも落ちたと言う頃からやつと悲惨さがわかりかけ、次に沖繩では女学生や住人が玉砕されたとか、日増しに緊迫して私にも、日本は駄目かと思えるようになっていた。間もなく終戦となり、移転先で勤めていると若い女は危いと誰が言うともなく伝わる。このまま父母の顔も見ずどこに逃げようかと、生れて始めて悲壮な気になった。結局、デマだった。六十歳近い今でもこんな思ひはあれから一度もない。父は負けたとくやしがり、海軍を退めた時頂いた勳章を、こんなもの何ものならないと投げ捨て、いいおもちゃだと孫にあたえたので実家にはかげも形もない。今では笑い話になつてしまつ

た。これからと父母が頼りにしていた兄は、終戦一年前志願し、早く除隊になれろと言つて勝手に中国戦線に出征した。終戦後十五、六年たつても生死がわからず、老いた父母は、兄のことを話す事を避けながらそれぞれのつとめを力の限り果していた。職業にも就けない。父も兄の顔を見て一年もせぬうち安心してか、帰らぬ人となる。その上酷寒の夜、歩硝に立ち神経痛までかかっていた。補償もしてもらえず、一家は戦争のため大きな痛手を受けたことが重く脳裏に残る。いっそ戦死していた方がましだと思ふことさえある。

「岸壁の母」の唄を聞く度に思う。岸壁にこそ立たなかつたがまさしく母の心情も同じ辛さだったのだ。私は、そんな母になりたくない。これからの日本に、いや全世界に、そんな母や妻を増やしてはならない。そのためには、国の政策をきびしく見つめて行かなければならない。強い女になって吾が夫、吾が子を守つて欲しいと願うのです。

国民が目かくし された戦争

関本千鶴子

(組織運営部・西尾鈴
子さんのお母さん)



手に手に日の丸の旗や提灯をかざした人並が、夜の商店街(鶴橋本通り)を鶴橋駅の方へと歩いて行く。そのざわめきの行列の中に、幼い私は家の人におんぶされながら、ねむい目で明るい店々の品物をめずらしげに眺めていた。これが私の戦争とのかかわりの初めである。

日中戦争初期の頃で、中国の都市(南京その他)陥落のニュースに提灯(旗)行列をして町中でお祝いをしたので

す。その中、日中戦争がアメリカとの代理戦の様になり、敵の兵器はアメリカ製でまるで以前のベトナム戦争と同じく、どんだん泥沼と化して行く中で私が小学三年生になった時には、日の丸の旗を立て校庭で君が代を歌い宮城を向いて遙拝し、教育勅語に頭を下げ、此の様な行事がめつきりと増えてうんざりでした。子供達は「小国民」と呼ばれて「一億一心」を合詞に約一億人の日本人が戦争へまっしぐらに向つて行つたのです。

小学校五年には、真珠湾攻撃をきっかけに前面からアメリカとの戦いが始まり、子供心に、これからどうなるのかと、日夜心配で心配でたまりませんでした。

デパートへ行く毎に見る品物が減つて行き、食堂のケースにはお豆腐のおからで作つた巻寿司がわずかに並べてあり、やがて、それも空になつて何とも心細い事でした。

他国の事と思つていた敵の飛行機が頭上に来て、爆弾を落とし始めました。私の家の前にも焼夷弾が落ちました。闇の夜空に火の玉がはじけて、無数に広がりながら落ちて来る。わあき

い、思わず言ったのが、地上でめらめら足元で燃える火は、さながら地獄の様に恐いものでした。幸い私の家は助かりました。小学校の裏の家はすべて焼け、そこで友人も一人死にました。それからは、学校でもツルハシやシャベルで穴掘りに、勉強の時間をつぶして校庭一面にいくつも防空壕を作りました。

恐かつたのは森の宮の軍需工場へ多数爆弾が落ちた時の事、女学校二年の

時だったか、学徒動員で枚方の真管発火装置(工場からの帰り、京橋駅で電車が止まってしまつたのです。敵機来襲です。急いで、そこらの壕を見つけて飛び込みました。すでに五、六人の人が口々に「南無阿弥陀仏」となっていました。

ザーという爆弾の落下音、目と耳を押えてもう駄目かと思つた途端ドカーン、防空壕がぐらぐらゆれてバラバラ土が落ちて来ただけで、命は助かりま

した。ドカーンの音を聞いたら助かつたと言う事です。

また別の日の事、空襲警報で工場から山の防空壕へ逃げる途中、早くも小型機グラマンが来た。急いで農家の井戸小屋へ皆で身を潜めたら、キューンという急降下音と共にバラバラと弾丸の音、生きた心地もしません。その時は、近くの駅で女学生が弾に当つて二人死んだと聞きました。

食べ物も次第に欠乏して来て、良く農家へ買い出しに行きました。が、苦心して売ってもらつた当時は、貴重品であるジャガイモ等もアベノの駅で待ちかまえていた威張つた男達に取り上げられてしまい、みじめな気持で母や姉と家路に着いたのは今でも忘れません。それでも愛国心一つに教育された私は「国の為」「天皇陛下の為」の標語そのままの気持で、ケーキやチョコレートは夢に見ながら、ただ勝つまではと満員電車で疲れながら、真管造りにせいで出しました。真実の戦況は何一つ知らされず、勝つやら負けているのやらさっぱり分らぬままに敗戦の日が来ました。女学校三年生の時です。女の先生は「もしアメリカ兵が来た



ら男装して山中に逃げ込む様に」とか、若い軍人の工場長は「忠臣蔵の精神を忘れぬ様に」とかの訓示を聞かされて不安でした。

空が静かになって、やがて真つ暗だった夜の町にちらほら灯りがともり出した時は、ほんとにきれいだなあ」とやとその時終戦を実感しました。

敗戦を境にして始めて、自分の無知を悟りました。先生に教わった通りに米英を鬼と思い、天皇の為、東洋平和の為に命を捧げるのは当然と信じていたのです。世界の国々の事実は何一つ知りませんでした。教えてもらえなかったのです。「鬼畜米英」「天皇陛下の為」「大和なでしこは」等口ぐせの様に言っていた歴史の先生は「民主主義とは」などと講義を始められ、前記の工場長は見事に軍服を真白いスーツに替えて、さっそうと中の島のあたりを闊歩しているのに偶然出くわした時は、しばし、我が耳我が目を疑ったものです。

今だに私は花火を見ても焼夷弾を連想し、君が代、日の丸には鳥肌が立つ思いがします。そして常に世界の国々のニュースに神経が動きます。二度と

再び天皇を日の丸を戦争の道具に利用すべきではない。国民に目かくしさすべきではないと叫びたい。

いつ戦死するか
わからない我身

中山 順一

(枚岡支部・若宮範
子のお父さん)



呉市空襲と母の事

昭和二十年六月頃の事だったと思います。私は呉市沖の情島の特攻基地で、伏竜隊の隊員として毎日海に潜り、棒地雷をカッターボートにつき上げる訓練をしていました。田舎の母から便りがあり、五月某日呉市にて面会したい

あの夜、突然空襲警報のサイレンが鳴り出すのと同時に、焼夷弾が落ちてきたそうです。家のそばの高台の側面に、横穴式の防空壕があったそうです。

割合い早く奥の方までたどり着く事が出来たようですが、防空壕の入口附近に焼けだした家の材木の煙りが奥の方まで進入して来て、息をするのも大変だったそうです。地面を両手の爪が血にまみれる程掘り続け、その穴に鼻を突っこみ、両手でおおって何とか持ちこたえたそうです。何時間か経過して、表が明るくなり、そろそろと出て行つたようですが、壕の中程から死んだ人がごろごろといたそうです。母は下駄もはいておらず、そこら辺に散らばっている下駄を片ちんばに拾い、やっとの事に表に出たそうです。幸い所持品は全部無事であったようですが、お世話になった将校さんの家は全焼でその方達とも会う事が出来ず、仕方無しに駅の方向に歩き出したとの事です。空襲下の鉄道は方々で寸断され、呉から高松に到着するまで、三日位を要したとの事です。やっとな連絡船で高松港についた夜、またもや高松の空襲で、危く難をのがれる事が出来たそうです

が、その日も高知市は大空襲で市の大半を焼出したそうです。

やっとの思いで高知の高須の家にとどりついたのは、田舎を出てから五日位たつてからの事であったそうです。当時でも鉄道が順調なら呉市で一泊しても一泊二日の旅です。五日たつても帰らないものですから、きつと中山のおばさんは、どこかの空襲で死んだのではともっぱら噂し合っていたそうです。

あの時母から貰った日本刀は、復員の時持ち帰りましたが、高知駅から高須までの歩きながらの道すがら、丁度夜半でしたので、並木に切りつけたりしてとうとう刀が鞘におさまらなくなり困った事をおぼえています。そのうち銃刃法所持について許可制が出ました折、父が刀を二つにおり、ナタになつてしまいました。

特別攻撃隊第五伏竜隊の事

昭和十九年四月、私は、愛媛県の松山航空隊に第十五期甲種飛行予科練習生として入隊しました。十七歳の時です。入隊後、松山航空隊が度々の空襲で壊滅的な被害を受け、松山市内の小

との事、軍刀を持参するからとの便りでした。日曜日の或る日、私達はボートで呉港の岸壁で母を迎えられました。交際をたよって、或る将校さんの家で母と楽しいひとときを過しました。当時私は十八歳でしたが、特攻隊員と言う事で酒も煙草も支給されていませんでしたし、上陸の際には色街にも出入り自由でした。もうすぐ戦死する身だからと言うお上の心づかいでしたでしょうか？

私はその日は母とずっと一緒に過ごし、夕方門限迄に情島に帰着しました。今日の楽しかった事をあれこれと思い返しながら寝につきましたが、夜半戦友にたたきおこされました。何事かと海辺に出て呉市の方向を見ると、花火の様な焼夷弾が雨あられの様に呉市の上空を襲っていました。そうだ、今夜母は、呉市のお世話になった将校さんのお宿に泊まっている筈と思うと、矢も楯もたまらず、ボートに乗ってかけつけたい衝動にかられましたが、その様な個人的な事が出来る筈はありません。ずーとあとになって復員後に、母から、あの呉市空襲の模様を、聞かされました。

学校に一時的に疎開するまでの一年間は、予科練としての基礎的訓練に明け暮れておりました。

昭和二十年二、三月頃は敵軍が沖繩にも上陸しており、太平洋戦争も末期的な状況にあり、我々予科練は正規の訓練を受ける設備も施設も、ほとんど皆無に等しい、毎日毎日飛行機用の防空壕ばかり掘りつづけて、予科練では無く土科練と云われた毎日でした。そのうちに、徳島県の山奥に松根油づくりに狩り出され、明けても暮れても松の根掘りをやらされました。ガソリンが欠乏してその代替として松根油より燃料を作り出したのです。

二十年五月のある日、特攻隊の募集がある事を分隊長から聞かされました。長男以外で水泳が出来ると云う条件です。私は長男でしたが、現実の松根油作りにいや気がしていましたので、すぐ応募しました。高松港から海軍の巡洋艦に乗り、着いた処は呉市の沖合いにある情島と云う周囲四軒程の小島でした。五月中旬頃だったと思います。全国各地から、我々と同じ年頃の若者が、およそ四百名位情島に集結いたしました。隊長は名前は失念しま

中はみつかるからと戸を閉め、まっ暗の中で息が苦しく、それはつらい思いを致しました。埼玉県の大宮近くで列車から飛び降り、東京まで夢中で歩いていったことは忘れられません。

今この年齢になって、一生かかって築いた財産を一瞬のうちに失い、成人するまで育てた二人の息子を（幸いにも生還しました。）一枚の召集令状で連れ去られ涙も見せなかった両親の胸のうちを思うと、やりきれない思いで胸が痛みます。

私は戦争中の悲惨さより、敗戦後の希望を失った日々の空しさ、屈辱感、心も体も疲れきり、殺ばつとした日々は、今日の豊かな日本から想像も出来ないことで、そのことの方が私に戦争の傷を感じます。

四十年の月日の流れに、いつしか戦争を忘れようとしているのはどうしたことでしょう。それは、私が当時、まだ責任のない子供だったからでしょうか。それとも、現在、平和という居心地よい環境にひたりきり、苦しみを忘れるようとする人間の身勝手さなのでしょう。でも、つらくてももう一度思い返して、老いが日毎に背後にしのび

寄る昨今、次の世代に語り伝える義務があると思います。それが日本人のいつわらざる歴史なのでありますから。

苦しい中 助けあつて 暮しました

角野美尾子
（三国ヶ丘支部・長谷
芳子さんのお母さん）



私が結婚しましたのは昭和一五年ですが、当時すでに食料不足でしたので、新婚旅行にお米を持って行きました。翌年、長男が生まれましたが、その頃から配給が始まりました。主人の勤め（神戸の三菱造船）の關係で六甲の麓に住んでいましたが、時々、空襲がありまして、警報が鳴る毎に子供をおんぶし

て山の方に逃げました。主人が、一年間の千葉の騎兵連隊に幹部候補生として行って帰った頃は、空襲はもっと激しくなりまして、家の者に防空壕を作り、軍刀など大切なものを入れておきました。昭和二〇年、次男が生まれましたが、次男はその防空壕の中で生まれたのです。空襲のさ中、かけつけてくれた産婆さんに感謝したものでした。すでに三歳になっていた長男は、飛行機の音を聞くとすぐ、自分からすすんで防空壕に入ってしまったものです。でもその防空壕では危いということで、山の方へ横穴式の防空壕を主人が作ってくれました。

当時、艦載機と呼んでいましたが、低空飛行してくる米軍の飛行機が飛びかかっていました。空襲警報が鳴ると、主人に「早う逃げろ！」と言われ、長男の手を引き、まだ首のすわっていない次男を背おって、山の防空壕に避難しておりました。そんな時でも、主人と一緒に逃げないで、一人家を守っておりました。

そうした毎日でも、主人は和田岬にある会社まで歩いて通っておりまして、二時間以上かかるので、会社に着



くとお昼前になるのですが、皆さんと無事を確かめるだけでも：と言うことでした。道中、空襲にあつて死んだ人や、馬などが道端にゴロゴロころがっている中をかきわけて歩くことも、度々あつたそうです。当時、三菱造船は軍需工場でしたので、召集はありませんでした。

食料の配給は大豆がほとんどで、大豆を水でふやして、すり鉢ですりつぶしたものを焼いて子供達に食べさせておりました。野菜は、はこべやあかさあてがいました。燃料には、空襲で焼けた家の木を拾って賄いましたが、

水道も出なくなり井戸水を使っていた。その水を汲んで、日なた水にして子供達を洗ってやったものです。

戦争中も、神戸は外人さん、特にドイツ人学校がありましたので、ドイツ人がたくさんいました。戦争が激しくなると、だんだん外人さんの数が減ってきていき、終戦の頃は一人もいませんでした。みんな抑留されて北海道へ連れて行かれたんです。みんないい人だったのに。

家が焼けたのは昭和二〇年八月六日で、あれは明け方でした。空を見るといつもより沢山の艦載機が飛んでいま

したので、主人の号令で、親子三人防空壕に逃げました。主人は家に残っておりましたが、しばらくして服をあちこち焦して、私達のもとにやってきました。無事でよかったです。壕の中で一夜を過ごし、翌朝、何ともいえない気持ちで家に帰りました。全くやけの原でした。これからどうして過ごそうかと。でも、家が残った人達が親切にしてくれ、数日お世話になりました。どの家も被災者ではいきりきれないほどでした。そして一五日を迎えたのです。

口では言い表わせない気持ちでした。主人は内地の軍需工場勤めとなると、戦犯になるのでは：ということと会社をやめることにしたので。そして、故郷の堺に帰ってきたのです。

三年前に主人はなくなりましたが、戦時中から今まで主人の忍耐強さに助けられたことが度々ありました。そして、戦時中は、皆が苦しんでいましたから、近所の方とも助けあい、励ましあいながら暮らしていたことについてはなつかしく思います。でも今の平穏を本当にありがたく思っております。

（聞き書き）

老いた父までも 召集された

富田林中央支部
鳥居 辰夫



「おじいちゃん、何年生れですか」と家内が尋ねると、「一九〇二年生れだ」と答える。「明治何年ですか」「さあ」と私の父は答えていた。私は明治何年生れか知ろうとも思わないし、今だに知らないが、私は一九二八年生れ昭和三年生れである。

朝鮮黄海道黄州郡青龍面で生れ、敗戦までそこに居た。まわりには日本人は私の家一軒である。リンゴ園を営み、まあまあ生活であった。天皇と同じ

年齢である父に一九四五年応召が来る。周辺の朝鮮人はおどろき、どうしてこんな年寄りを戦争にもつていくのかと口々に云いながら送ってくれた。

たしか私たちの学校生活は奉安殿にまつている写真の天皇を拝み、新聞等とした天皇の写真をよく見たが、片や、年いった父とは比較にならない。当時の人々はみなふけていた。現在の四十年代の人達とは想像もつかない、よぼよぼであった。

母と私をはじめ、子供六人を残して出征して行く。軍隊生活は、始めてである父には、どの様な生活が待っていたのだろう。

時を同じくして、母方の叔父が出征するはめになる。叔父は軍隊に行くより、恩給の支給が少しでも早くもらえるためと、警察官として鮮満国境の警備隊として志望したのにもかかわらず、敗戦も近くなる様相時代、抗日ゲリラの活躍が活発になるにつけ、たまらなくなり、解除希望を出す。叔母は家財道具全部を私の家に預け、福岡県の実家に帰るが、叔父を待ちうけているのは召集令状であった。私の父と同じ

話を村の人から聞くにつけ、本当に解放された民族の声を聞く様な気がした。

その折り、父が、着のみ着のまま、ひよっこり帰って来る。無事の姿を見た時、近所の朝鮮人も祝ってくれた事は、今でも鮮明に脳裡に浮ぶ。

外地引揚げの道程は、北朝鮮より京城まで半月の日数で、ようやくたどりつくが、途中朝鮮人との対話をする父の言葉は、「柳行李一つで新天地として朝鮮に来て、いろいろ求めてみても、他の国を侵してまで財をなすことも出来るものでない。唯、私は子供六人という財産を朝鮮の地で授り、日本という祖国に帰るのだ」と。朝鮮人は「お気の毒に」と好意の言葉を掛けてくれ、食糧も少々与えられる。私達の姿を戦争体験者以外の、または、外地引揚者以外の誰が知ろう。

九州の母の実家に十二月初旬に到着するも、ここも苦しい田舎百姓の家。食糧にこと欠く中、叔父の戦死の公報が届く。叔母は身寄りない今後の生活を考える時、想像を絶する、自殺をするも父の顔を知らない一人息子も里子に出された。今その子の消息は私達は

知らない。戦争はいろいろな人達に不幸をまねいた。絶対にこの不幸を与える戦争はするべきでない。

生きて還れて よかった

向ヶ丘支部
前田 政治



入営は二〇歳の誕生日迄に、と決められていたので、甲種合格した私は一九歳と一〇か月で門司へ行きました。

入営する迄の五日間、民宿でお世話になったのですが、大そうなご馳走の毎日でした。支払いは五円だけで良いのだろうか、と思いましたが、今になって思えば、民宿の人は、もう帰って

じ、都市平壤の部隊へと入隊することになる。

父と叔父に面会に行くも、仲々会えるわけがなく、叔父はすでに人づてにフィリピン方面に派遣されたこと聞き、ただただがくせんとするのみです。父は工兵隊の一兵卒として防空壕掘りに専念すること。これは後日談となるが、銃を持つこともなく、唯、老人兵の集団は朝鮮人現役志願兵のバリバリにしがれる毎日の由、願はくば軍隊は階級の世界、息子よ、将校になつて呉れ、金は田地田畑を売つても資金をつくるから、との父の言葉は充分に理解出来なかつた。日本の軍隊にも金が左右されるとは。職業軍人でない幹部候補生は、金が必要であることを知らされる。幹部候補生の資格を持つ私には、何かしら、不安をおぼえる。金をつかつてまで戦争に行くこともあるまい。

リンゴ園は荒廃にまかせざるはかない。わずかな小作人の好意も、収獲には程遠い事として受け止めるなか、一九四五年八月十五日敗戦となる。周囲の朝鮮人の独立萬歳(マンセイ)の声を聴くにつけ、日頃朝鮮人の独立運動の

こん、と思つたんでしようなあ。輸送船が爆撃されるようになって久しく、結局私らの乗った船が最後の輸送船になりました。

物資が乏しかったのか飯盒の代りに孟宗竹の筒を持って、軍服を着ただけでした。装具を貰ったのは南京に着いてからでした。それでも銃は一〇人に一丁でした。

門司から五日程かかって釜山へ着き、それから延々一週間も貨物列車にゆられて南京に着きました。最終目的地は漢口で、私が入ったのは、鉄道第一連隊です。汽缶員以外は前線に行かされ、そうなつていけば、私も死んでいた訳です。

中国は木がなくてね、見渡すかぎり平原で、山の近くにだけ木がはえているんです。草を丸めて売っていたり、マキも売りにきていました。風呂に入るのが少なかったのは(初年兵は一月に一回)水が無いのではなく、燃料がないからだとなつて教えられました。

だから、鉄道の枕木も、木ではなく鉄枕木でした。線路の幅は日本は三フット六インチ、あそこは四フット。

シベリア鉄道は広軌と言われましたね。

漢口から瀋陽まで機関車一台につき四人が一組になって運転しました。当時は既に制空権はなく、昼はトンネル内に機関車をかくしておき、夜だけ動かしました。一日一列車だけです。敵襲の時は機関車を守り、空襲の時は機関車をほって逃げよ、と言われてました。

中国を占領していたと言っても、「点」でしかなかったですね。電信柱一つなおすのでも、その電柱中心に半径五〇メートルの暫壕をまず掘って、見張りながらですからね。

一日一回必ず定期的に空襲がありまして、日本軍の高射砲もただ射つだけなんです。一機でも落とそうものなら、こっちの高射砲を全滅させられますからね。夜の空襲の時には、不思議に地上の三点から火花があがるんです。すると、その中心が爆撃されるんですわ。

私が行っていた時が、もう戦争末期ですからねえ。二二人いた戦友のうち戦死は一人。他の部隊でも、戦死などはまずなくて、アメリカ赤痢が腸チ

フスカ、栄養失調で死んでいきましたなあ。

それに何と言っても情けなく哀れだったのは、ノモンハン事件の捕虜交換のことです。捕虜になっていた日本兵は国賊だと言われてやつと帰ってきたのに結局便所の中などで、首をつって自殺したんですわ。本当に日本の教育というのは今では想像もできませんわな。残念ながら、アジア中で悪いことしてきたんだから、「日の丸」や「君が代」は悪魔の印でしょうなあ。

食べる物もなく、常に腹がへって、腹いっぱい食いたいなあ、というのが毎日の望みでした。風呂にも入りたいと思った時もあったけれど、それより空腹が一番つらかった。



敗戦を知ったのは、八月一七日でし

た。一五日は陛下は頑張れよ、と言うとつたんと違うか、ということ、一六日には空襲もなく、中国人の態度が違ふ、こりやちよつとおかしい。そして一七日に上の方よりはつきり敗けたことを知らされました。

いざ敗けてみると、戦時中はいくらに物資がなかったのに、敗戦を知らされてから、なかった筈のたばこを五〇箱、石けんも長いまま一〇本程買ったのを憶えています。

敗けてからも鉄道の仕事があったから食べてこられたんだと思います。敗戦後は、釜たきを私ら日本人でしました。悪い薪で、いくら薪でたいても蒸気が上らず、必死でたきました。中国人の機関士、腹立ててるやるなアと思いましたが、駅に着いたらたばこを買ってくれました。以前は自分らが苦労したので、ご苦労さんという意味だったのでしようね。

敗戦前は、中国人はあばら家で寝てる間に雪が積っても平気で眠っているのを見て強いなア、と思っていたけれど、敗戦になったら日本人も同じでした。ただただ内地を憧れました。内地は美しいと思ってましたから。驚きま

したよ、大阪駅におり立った時は。人々のきたないかつこうもいっしょだし、街のひどさは想像外でした。還ってこられたのは若くて丈夫だったからですな。残留日本人孤児が話題になる度に全滅した日本人租界を思い出します。本当に生きて帰っただけが辛いやなあ、と。(聞き書き)

戦争体験者のつとめとして語りつぎます

泉北みきた支部
立石雉枝子



四十一年前堺大空襲の夜、九歳の私は焼夷弾の雨の中を母や姉妹達と必死

でにげまどいしました。B29の爆音と共に空が真昼のように明るくなり、バリバリという爆発音、そしてねばっこい油のような炎が地面をシュルシュルとはいまわります。人々は泣きさけび、親は子を親を呼びそれは地獄の中のようにでした。私の前を火だるまになってころげまわる人、赤ん坊の首が切れて、母親の背中で頭がぶらさがっているのです。今も時々あの情景が夢の中に出て来て私の心はくもります。四十一年が過ぎた今も家族や肉親を失った人達の心のいたでは決して消えてはいないでしょう。

私が新聞で堺空襲をテーマにした大空襲劇を六月市民の手で上演すると言う呼びかけを見て早速応募したのもこんな気持ちからです。六十七歳から二歳の子供まで五十名が集まり、熱い想いで練習を始めました。週三回夜の練習はきびしいものですが、あの時十中八九なくなっていた命が今あることよろこびを感謝し、同時に悲痛な想いでなくなれた人達への鎮魂歌になるなあと思ったからです。

これからますます戦争体験者も少なくなり、戦争の傷あと、遺品、戦災跡

も少なくなっていくでしょう。戦争体験者のつとめとして親から子へ、子から孫へと再び起してはいけない戦争の悲惨さを語り伝えて行くべきでしょう。

しかしこんな気持をよそに、ソ連やアメリカでは軍備拡張がおたがいに牽制しながらも競われている様子です。それは四月二十九日に起きたソ連の原発事故のことも解ります。アメリカの偵察衛星が撮影した情報収集力はただただ驚くばかりです。はるか空のあなたから原発の建物の屋根が吹飛ぶさまを写しとるといいますから……。

キナ臭いニュースはもうたくさんです。世界最初に原爆を受けた日本、世界最初に軍備を持たない国となる事を宣言するのいいのではないのでしょうか。そして日本が率先して世界平和を呼びかけなければいけないとパルメ首相の死と重ねて想いつづつております。





平和への歩み

(短歌)

狭山支部
城 たけし



きのう濡れきょうも濡れるん弱き身に
平和の行進つづける妻

濡れし靴火もてかわかしゆく妻よ願
切なき平和の行進

平和願ふ行進の妻気遣へり梅雨なおし
げき空仰ぎつつ

核廃絶のゼッケンつけし雑種犬あるじ
の僧と日盛りをゆく

嘉手納基地めぐる緑に擬装あり非核の
国にひそみ棲む核

「皇軍」はついに沖繩守らざりき自衛
隊への疑義深む人ら

未来戦の図式に人ら学びたり沖繩があ
かす安保下日本

外苑に分列行進せし学徒その虚無感が
撥ね上げし水(昭和十八年十二月一日
学徒出陣)

特攻の決意問わるる群れにゐる石のご
とくに右の手挙げき

あらためて「きけわだつみのこえ」を
読む平和おびやかす動きしげければ

無関心でいること 考えないでいること 黙って見過すこと こそ危険！

ヴァイツェッカー演説
「荒れ野の40年」を読んで

白鷺支部
西田 操

昨年五月八日は西ドイツの敗戦四十
年目にあたります。その五月八日にリ
ヒャルト・フォン・ヴァイツェッカー
大統領が、連邦議会で行なった演説は
内外で多くの感動をよんだといいま
す。私もおそまきながら今年になって
この演説の全文を読むことができました
。(岩波ブックレットNo55)本場に深
い感銘を覚えました。と同時に、戦後
世代の一人として我が国のあの十五年
におよぶ侵略戦争の時代をもっとよく

知らなければノと強く感じました。次
に大統領の演説を簡単に紹介してみた
いと思います。大統領はまず、
「我々にとつての五月八日とは人々
が嘗めた辛酸を、想い起こす」日で
あり、「想い起こす」とは過去の出来
事を誠実かつ純粹に想い浮かべるこ
とによつて、それを自らの血肉と化
すことであり、そのためには真実を
大切にすることが要求される。今日
この日は(ヒトラーが政権についた)
一九三三年一月三十日と切り離すこ
とは許されない」と
と位置づけています。そして自国がか
つて犯した戦いと暴力支配によつて犠
牲となった人々を、一つ一つ具体的に
列挙し痛恨の思いをこめて謝罪してい
ます。その中には当然、大量殺戮され
た六百万のユダヤ人はもちろん、ソ連、
ポーランドの無数の死者や銃殺された
人質、宗教的・政治的信念の故に迫害
された人々、各国のレジスタンスの犠
牲者、また自国のレジスタンスの犠牲
者たちがあげられています。
あの筆舌に尽しがたい暴力支配ユ
ダヤ人を人種としてことごとく抹殺す
る、という歴史に前例をみない犯罪に

手を染めたのは少数であったが、アウ
シュヴィッツでのホロコーストに至る
まで我々は何をしてきたか——余りに
も多くの人たちが実際に起こっていた
ことを知らないでおこうと努めていた
のではないか、当時まだ幼かった私の
世代も例外なく——と、率直に反省す
るのです。ここには当時、良心を麻痺
させ、目を背け、沈黙していた多くの
同時代人一人ひとりの責任を、自ら厳
しく問いかける強靱な精神があると言
えます。強い精神はさらにつづいていきま
す。

このような非人間的なファシズムの
台頭を再び許さないためにどうすれば
よいか。老幼を問わず全員が過去を引
き受けねばならない。全員が過去から
の帰結にかかわっており、過去に責任
を負っている。それ故に老人と若者は
互いに助けあい、過去の戦争体験と記
憶を心に刻みつけなければならぬ。
心に刻んでおくことがなくなつた
時、太平は終りを告げるのが歴史の真
実である。五月八日にさいし、能うか
ぎりの真実を直視しよう！と結んでい
ます。

「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となる。非人間な行為を心に刻もうとしない者は、再び新たな伝染病にかかりやすい」

大統領のこの言葉は、とりわけ私ども戦後世代に発せられた警句として受け止めたいと思います。この素晴らしい演説をぜひとも多くの方に読んで頂きたいものです。

さて、一方、我が国の中曾根首相はどうでしょうか。同じ四十年目の八月十五日、戦後の首相としてはじめて靖国神社に公式参拝しました。従来の政府の「違憲の疑いあり」としていた考え方を、ひっくりかえしてまで公式参拝に踏み切ったのは何のためでしょうか。靖国にはあの侵略戦争のA級戦犯・東条英機らが神としてまつられているというのに……。

現憲法の国民主権、戦争放棄、基本的人権……これらの民主的平和的原则は今後も守られ発展させられこそすれ、再び天皇の元首化を許すことがあってはなりません。

大切なことは私ども一人ひとりが主権者としての自覚を高めることです。社会の動き、政治の変な動き、平和を

おびやかす動きに、無関心でいること、考えないでいること、黙って見す過すことこそが危険なのです。そして私ども戦後世代は、とりわけ過去に目を閉ざすことなく、あの十五年戦争がいかなる時代であったかを、より深く知ろうと努めねばなりません。老人から、父から、母からあの時代の慟哭の想いを聞きだし、子から子へと正しく語り継いで、戦争の惨禍を心にしっかりと刻みつけなければ……。

さて私はヴァイツェッカー演説を読んでこうした思いにかられ、ここ最近集中して本やら新聞に寄せられた戦争体験者の手記やらを読んでみました。どれもが血のふきでるような体験であり、告発です。

「国体護持」のための「捨て石」とされたあの沖縄県民の犠牲。東京大空襲の犠牲者たち。人類史上はじめての原爆投下に無惨に死んでいった人々。生き残った被爆者たちの苦悩……。

あの十五年戦争とは何であったか。それは神聖にして不可侵、唯一絶対の天皇が国民の上に君臨し、国民は飢えと貧困に塗炭の苦しみを負わされ、自由と人権を抑圧され、真実を知らされ

ず、「八紘一宇」の「大東亜共栄圏」づくりのための「聖戦」だと信じこまされ、中国、アジア諸国の他民族支配と略奪に狩り出され、さらには米英を相手に太平洋戦争に突き進む凶暴な侵略戦争にかりたてられていった時代であり、その結果、三百万の国民の生命と、二千万を超えるアジア諸国民の生命が奪われたのでした。その根源に絶対の権力をもった天皇の専制支配があったのです。

私ども戦後世代はこのような暗黒の時代を二度と到来させてはなりません。無関心でいること、考えないでいること、黙って見過ごすことこそ危険です。「過去に目を閉ざす者は現在にも盲目となる」——この言葉の重みをかみしめながら、戦争体験を子から子へと語り継ぎ、平和への願いを強めていきます。そして、私たちと私たちの子供たちのために、明るく住みよい社会を目指していきましょう。